

淨土

淨土宗開宗八百年記念慶讃特集号

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回二日発行)
昭和二十四年四月二十八日 改訂 (特別授受承認書) 第三二五号
昭和四十九年三月二十五日印刷 昭和四十九年四月一日発行

第四十卷

第四号



1974
4



和顔
是地

知恩院門跡信宏



和顔愛語

知恩院門跡

岸 信 宏

浄土三部經の一つである無量壽經で、法藏菩薩が一切衆生救済のために四十八の本願を發し、その本願を成就せんがために、十方世界の諸仏菩薩に道を尋ねて修行をなさった時の態度を示された言葉の中にある句です。多くのすぐれた態度の中の一つのすがたであります。私共の日常生活の上にも、最も親しむべき言葉であります。つねに「やわらいだかんばせと愛情にみちた言葉」をもって、人々に接して行くということが、どんなに大切なことであるかは、申すまでもありません。ことに現代のとげとげしい社会の状況、対立と闘争とに明け暮れている中に、その言葉の必要性が、どんなに大きいものがあるかは申すまでもありません。

目 次

和 顔 愛 語	岸 信 宏
---------	-------

浄土宗のおしえと現代

浄土宗のおしえ	佐 藤 良 智	(2)
法然上人と現代	竹 中 信 常	(5)
法然上人と浄土三部経	真 野 竜 海	(9)

対 談 念 仏 の 世 界

武 田 泰 淳 × 佐 藤 治 子	(2)
-------------------	-----

座談会 法然仏教とその展開

寺 内 大 吉 × 梶 村 昇	(4)
-----------------	-----

浄土宗の信仰と生活

浄土宗に伝わる民俗的信仰	中 村 康 隆	(13)
念仏と生活	宮 林 昭 彦	(16)
四季おりおりの寺まいり	安 居 香 山	(20)

法然上人霊場めぐり・青 竜 寺	村 上 博 了	(26)
-----------------	---------	------

法然上人略年譜	(41)
---------	------

浄土宗の宝物「足引の御影」	(48)
---------------	------

浄土宗の流れ

念仏山を下る	佐 藤 成 順	(24)
日本浄土教の展開	佐 藤 行 信	(28)

表紙「法然上人像」松濤達文謹写

浄土宗のおしえと現代

浄土宗のおしえ

佐藤良智



法然上人によって浄土宗が開かれてから八百年の年月が流れました。日本全国の津々浦々まで念仏の声のしないところはないと言われたし、また現在もそうであります。上人以前の仏教は貴族のなかに広まった仏教であつたのです。日本の人々にも仏のみおしえのありがたさをおつたえになつたのが上人であります。今日ではだれでも求めようとすれば、その教えがどのようなものであるか知ることができ、また信ずる

ことも実行することもできるのはありがたいことです。そのようなきつかけをつくつて下さつたのが法然上人であります。仏のみ教えはインドに始り、シナを通じて日本にやってきました。

その中でもっとも信じやすく、実行しやすいのが法然上人のお開きになつた浄土宗であります。法然上人の前の仏教は、いくつの宗教でありました。また、実行することがむづかし

い教えでありました。いったい信ずるということはなかなかむづかしいのですが、上人の教えは実行することからだんだん信仰が深まってゆき、わかってくるみ教えです。それがなにより大事なことであります。一口に言うとな上人のみ教えはみなさんもよく御承知の上に「なむあみだぶつ」と御念仏を称えることです。口のある方はだれでもできることであります。一声の御念仏、すなわち、「なむあみだぶつ」と申すことだけでだれでもが救われるということです。沢山申せば申すほどよいのですが、「なむあみだぶつ」の声のなかにひたりきってしまうのだが一番よいのです。上人は、これは行うことはやさしいが、これで救われてそれ以外にはなにもいらないうことを信ずることはなかなかむづかしいと申されていますが、あまり、やさしいのでかえって信ずることがむづかしいとしても申しましょうか。

いったい、「なむあみだぶつ」とはどういうことかと申しますと、「あみだ」さまというみ仏にすべてのこと、即ち身も、こころも、うちこみ、それと一つになるということであります。では「あみだ」さまとは、なにかと申しますと、漢字にしてみますと、無量寿と無量光とをもったみ仏ということとであります。ことを換えて申しますと、宇宙の永遠の生命（おいのち）と無限の光明（おひかり）をもたれたみ仏と

いうことです。わたくしどもはこの永遠のおいのちの中に生かされているのであります。このおいのちの外にあることはできないのであります。出ようとしてもでれないのであります。わたくしどもは生れたり、死んだりいたしますが、本来、生とか死とはこのおいのちのかりのすがたにすぎないのであります。ただあるのはこのおいのち、一つであります。それがわからず、逆っているのであります。生死をこえるということはこのおいのちの中に生きるというのであります。このおいのちのなかによみがえるということであります。それが永遠の生命のなかに生きるということであります。無量光はおひかりであります。わたくしたちのいのちもみ仏のなかに生かされているのですが、それがおひかりにてされてこそかがやきが増します。おいのちがいきいきするのでございます。光りはくらやみを照らします。わたくしたちはみ仏のおひかりのうちにてらされています。いつもいつも照されています。

法然上人は、和歌にして居られます。

月影（月のひかり）のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ。と、

いつもいつもおひかりさまに、（今、月の光りにたとえて居られるのですが）てらされているのです。だれもだれもで

す。一人ももらさずです。ただ私共は、それに気がつかないのです。きがつきさえすれば、そのお光がかがやくのでございます。「心にぞ澄む」と上人は申されているのでございます。この歌は宗歌と言って浄土宗の歌になっているのです。

心に澄むおひかりは、私共の精神を清くすると共に、強くもするのであります。たえがたいような苦しみも堪え、他人の苦しみに同情し、苦しむものと共に苦しむ尊いところをうえつけ給うのであります。ともしびをともした人になし給うのであります。時代が濁ってくるとこのともしびが、ともすればにがりがちになります。現代の人の心をしらべてみると、他人に同情し、よい社会をつくるというような人はすくなくなっているそうです。それでは困ります。あみだ様のお光りがかがやかなくなってきたのでしょうか。このお光りをうける人が少なくなってきたのでしょうか。人類は滅亡してしまふというような考えが現在の一部に流行しているそうです。私共はどこ迄も希望をもつて生きなければなりませんし、努力しなければなりません。それにあみだ様のお力を信じお念仏を申さねばなりません。あみだ様は慈悲（愛の大きくなったもの）と光明（おひかり）をともった方でありま

す。慈悲は観音菩薩（かんのんぼさつ）と光明は勢至菩薩（せいしほさつ）となつてあらわれていられます。

無量寿は慈悲であります。すべてのものを生かし、いつくしみ、育て給うのです。私共はいつも、いつも、無量寿によつて、伸びてゆくのであります。私も子供も孫も伸びよ伸びよと守つてくださるのであります。救つてくださるのであります。それがお慈悲であります。御念仏を申すものはいつともそだてられ救われるものであります。伸びてゆくののであります。それがたとえ一声のお念仏でもあみださまに通じるのであります。このことをかたく信じましょう。それを信心というのであります。若い方は若い力で伸びてゆき、としよりは

お浄土に帰る力となつてゆくのであります。

無量光は智慧（知識のもう一段高いもの）であみだ様はこの智慧をおもちになりこれをおさづけ下さいます。「なむあみだぶつ」のなかには自ら智慧がふくまれています。ですからあみだ様を拜まずには居られませんか。人間にはこの慈悲（大愛）と知恵がどうしても必要です。世間を渡るにも心の温かさ、そして知恵が必要です。

浄土宗ではどんな愚かなものでも救われるです。なぜならあみだ様に帰依した人（心も身もささげた人）は救われるのです。一字も知らなくてもこの二つの力を持った仏さまが手をさしのべて下さるのです。どんな知識のある人もむしろ、おろかになつてひたすらあみだ様にお助け下さい、お救い下

さいとひざまづく人は若い人も、老人も、物持も、物を持たない人も、お救い下さるのであります。これを専門のことばでは万機晋益(どのような人でもあまねく利益を得ること)ができるとの意味)と申します。また重ねて専門のことばで、信機、信法、ということばがあります。機とは平たく申せば人間ということです。人間を信ずるということですが、これは自信があるというような意味ではなく、自分を反省し反省しつゝして、自分は無力なもの、愚かなものということに気

がつくことです。その愚な無力なものであればこそ、み仏さまは救つて下さるのだと信ずることです。大慈大悲のあみださまは無力だから、愚かであるからこそ救つて下さるのです。大きな大きなお力でいだって下さるのです。「なむあみだぶつ」と大宇宙の大生命と大光明のなかにとびこむのであります。これを他力と申します。すべての人を救つてあげようとの大本願を起し給ひ仏になられたあみださまにいだかれる大安心。これが浄土宗のお救いであります。



法然上人と現代

竹中 信常

偉大なる宗教者はすぐれたる「現代人」であると思う。なぜなら、その時代のすべての人を救うためには、その人々が共通に抱く悩みと苦しみが何であるかを適確に把握しねばならないし、したがって同時にそのような悩みや苦しみがどこ

から、どのようにしておこってきたかを正確に知らねばならないからである。そのためには誰にもまして、その時代がどのような時代であり、どのようにしたらよいのかということを知承知していなければならない。それ故に、多くの人々の魂の救

い手である偉大なる宗教者たるものは、誰よりも時代の「洞察者」であつたはずである。時代を知らずして人は救えない。その意味で偉大なる宗教者はその時代におけるすぐれた「現代人」だったのである。むろんわれわれが生きている二十一世紀に近い現代と、八百年の昔、法然上人が生きた時代とは歴史の上からだけいっても大きな隔りはある。しかし、いかなる時代に生きるにせよ、その人が真実と社会民衆のことを思う人であるなら、その時代の「現代人」であり、したがって八百年前も八百年後の今日でも、同じく常にすぐれた「現代人」として生きるであらう。

すぐれたる「現代人」としての法然上人が今日の「現代」に生きておいでになるとしたら、どのような時代の処し方をなされるであらうか。むろんそのこまかい言動については憶測する術はないにしても、法然上人にとって「現代」というものがどのように観察されるだらうか。——このことを推しはかるためには八百年の昔と今とのへだたり越して、そこに相い通ずるものが有るかないかをまず見極める必要がある。つまり、法然上人がいつの時代にも当てはまる、すぐれた識見を持っておられたということである。その識見とは何であつたか。

ここにおいてわれわれは上人の遺誠である「一枚起請文」の一文に思い至るのである。

もろこしわが朝に、もろもろの智者たちの沙汰し申さるる觀念の念にもあらず。また学文をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申すほかには別のし細候わす。但し三心四修と申すことの候は皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり。このほかに奥深きことを存ぜば二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候べし。念仏を信ぜん人はたとえ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらと申うして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし（傍線筆者）

この文意はすでに多くの人々によって充分に語り明かされているので、今更ここに繰り返すことはしない。ただ僅か二百四十余文字のこの文章の中に、傍線で示したように学文、智者、奥深きこと等々、いわゆる一般的知識、学問に対する反発が五回も繰り返えされているということは、重要な意味を持つものといわざるを得ない。「智慧第一の法然房」「ひろ深かの法然房」といわれ、勢至菩薩の再来とまで謳われ、奈良大仏殿再建に際しては当代の碩学を前にして浄土三

部經の講筵を敷いている。その模様は次のように語られている。

「三論法相の深義をとどこおりなくのべて、凡夫出離の法、口称念仏にしくはなし、念仏をせしらん輩は地獄に墮在すべきよし講説し給ければ、二百余人の大家よりはじめて覆面をしのけて随喜、渴仰きわまりなし……」

それほど学解に徹した法然上人が、おのれの身につけた学問の一切をふりすてて、臨終の一文においてこのことを繰り返し述べられているのである。こうした決定的な宣言も、つねづね上人が口にされている言葉、

「学生骨になりて、念仏やうしなわずらん」

あるいは

「さればとしごろ習い集めたる智慧は、往生のためには要にもたつべからず……」

などの結晶したものといえるであろう。

法然上人にとっては学問、知識は信仰にとって無用であるばかりでなく妨げであった。学問がなぜ信仰の妨げになるのか。このことについて今まで多くの論説がおこなわれてきたが、残念なことに、このことについて現代の状況に即応して具体的且つ実証的に説きあかして下されたものがない。（むろんこれは筆者の浅学のゆえかも知れぬが）

そこで、ここに

「ひろ深かの法房房」

という言葉を出すことしよう。

人間の知識とか智慧とかというものには二通りある。すなわち一つは非常にひろい知識をもつこと、いわゆる博学ということである。もう一つは一つのこととことんまで追求して、測り知れぬ程に深い智慧を持つことである。「ひろ深か」ということはこの両面をそなえたものという意味なのであるが、これはなみたいていのことで得られるものではない。勢至菩薩の再来といわれる法然上人にして始めて得られるものである。普通の人間はせいぜい努力して、そのいづれか一方を得るのがやつとであり、大概のものはそのいづれも得られぬのが一般である。なるほど、現在わが浄土宗にはすぐれた学匠が多い。いづれもそれぞれの専門の道は深く且つ犀利である。一方、本宗関係の外学の者にして、なお宗祖を語るものもまた少くない。これらの人々は広い視野のもとに宗祖の姿を描こうと努力している。両者ともに珍重すべき学匠たちである。しかし、筆者、事聞にして一人にして深く広い二面を兼ねそなえた人のあることを知らない。——そのように稀有な人である法然上人にして、みづからの学殖を信仰の前

には無用の長物であるといわれたことに意味があるのである。いわば至り尽し、究め尽したのちに再度、原点に立ち戻られたのである。このことを一般に「還愚」と呼んでいる。上人にしてのみ還愚なのであって、われわれ凡下のもは愚にも至っていないのである。

そこで 視点をかえていかなければ、八百年前の人々の知識と現代人の知識とでは質量において雲泥の差のあることはいうまでもないことである。八百年前のいと貧しく乏しい知識レベルの時代においてすでにその乏しい知識や智慧が信仰の躰になることをさとられ、「一文不知」を高く主張されたのであるから、今日、意識過剰の頭びつかに悩む現代人が信仰に対して躰きどころか、全く無関心であるのはむしろ当然のことといわねばならない。

人の心は猿が木から木へ転々と飛び移るように、ものからものへつねに揺れ動いて、少しもじっと静まることはないということをいわれた法然上人にして、現代人の心の状況はまさにおどろくべきものと思われるであろう。現在のわれわれはさまざまな情報の奔流のさ中にある。ラジオ、テレビ、新聞、週刊紙その他のマスメディアを通じて、あらゆる出来事がわれわれの頭の中に流れこんでいる。昨夜、地球の裏側で

おこった、われわれとなんの関係もないことが、今朝にはもう茶の間に届けられるのである。それを見たり、読んだりすればなんらかの程度でわれわれの心の一部を占領することになる。このような一見さ細な事柄でも無数に集積されれば、われわれの心は無用の知識で一杯になってしまふ。つまり「意識過剰」となる。それでもなお情報の流れはつづき、意識の上に流れこむ。これではついには、われわれの意識の入れ物はパンクせざるを得ない。そこまで至らずとも心の中には雑多な情報が渦を巻いている。心の静まることのないのは当りまえであり、信仰の心の湧き出る余地などあらうはずはない。明治の高僧七里恒順は、信仰心とは茶碗を上むきにしておくようなものだ。伏せた茶碗には湯はつげぬが、上むきにしてあれば信仰の湯をそそぐことができるといったそうだが、現代人の心の茶碗は上むきになっていても、その中には、すでに雑多な知識や誤った概成観念で一杯になっていて、その上に信仰の湯をそそいでもみんなこぼれてしまふ。法然上人が学問が信仰の用にならぬといわれたのはまさにこのことなのである。

われわれは余りにものを知りすぎている。われわれの心には余裕がなさすぎる。法然上人がもしわたしたちの前にお立

ちになつたとしたならば、何をにおいてもまづ第一に
「一文不知にならなさい」

といわれるであらう。一文不知とは心の雑物を一掃すること

なのである。「還愚」の前にまづおのれの「愚」を知ること
である。



法然上人と浄土三部経

真野 竜海

法然上人は、どのようなおろかな凡夫でも、ただお念仏をすれば、阿弥陀仏に救われ、浄土に生きることができるという、たいへんかんたんで、やさしい教を開かれました。しかしその基礎となる難かしい仏教の学問は、比叡山に登られた若い時から、また、浄土宗を開宗されてからも、徹底的に、続けられたのであります。上人は、木曾義仲が京都に乱入した日だけは、お経の勉強ができなかったといわれておるくらいであります。

さて上人は、初め求道にさいして一切経をいくたびかお読

みになりました。一切経というのは、お経はもちろん、僧団や信者の戒律の事を書いた律、それらに対する註釈や理論を書いた論と合せて三蔵といわれるものすべてでもありますから、ものすごい量となります。しかし、それらを学ばれても、上人には、その中に説かれている戒や、冥想、学問によって悟れるような能力はないという深い人間性に立った自己反省がありました。悟りは理想であります。人間である限り、私共は煩惱はなくならず悟りはありません。学徳ならびなき上人は、まことにだいたん、そつちよくに、そのこと

を、私共、凡夫の、いわば代表として、表明されたのです。

法然上人は、それでは、そのような凡夫の救われる教は何かと追求しながらの長い求道のある時、はからずも、中国の善導大師の『観無量寿經』の註釈された御書物の中に、念仏こそ、浄土往生ができるという文句を見つけられたことにより、浄土宗を開かれるにいたりました。その善導大師は、一切經の中でも、『観無量寿經』、『阿弥陀經』、『無量寿經』の三つの經が、念仏の教の主要なものと考えましたのを、上人は、明確に、浄土宗の正しい依り所の經として、「浄土三部經」としてはじめて選定されました。經名の中、無量寿とは阿弥陀仏と同じことです。

以上のような上人の心の旅でありましたから、浄土三部經は、全仏教、一切經の浄土宗におけるエッセンス、精髓であります。一切經の中の、単なる三つの經ではなく、浄土宗の一切經といってもよろしいと思います。

この三部經を、上人の御心によりかんたんに説明します。

『無量寿經』は、浄土を定めるにさいしての阿弥陀仏の本願四十八、とくに、その第十八の願——一心に浄土に生れんことを望む衆生が、十念、つまり十回でも、南無阿弥陀仏と称えるならば、かならず往生させようという願——を説いておりま

す。浄土宗では、日常の動行中、この願の説かれている直ぐ後の經文で四つの誓願の形にして説かれている『四誓偈』を、よく誦するわけです。三部經の中でも本となるお經です。

『観無量寿經』は韋提希夫人の請に応じて説かれたものです。無量寿、つまり阿弥陀仏やその浄土の姿を観察することや念仏往生のことが説かれています。觀察には二種類あります。一つは定善じやうぜんといい、精神集中——定——によるもので、第一から第十三の觀法があります。一つは、散善さんぜんで精神の散乱し動揺しやすいもの——散——に、第十四から第十六の觀法があり、とくに、第十六は惡人、凡夫も、南無阿弥陀仏と称えれば往生できると明らかに説かれています。その後の經の結語に、とくに「無量寿仏の御名を持て」すなわち、称えよ、とあります。上人は、私は、この定善や散善でなく純粹に、念仏を勧められた仏の御心によって、念仏するのであるとされました。上人が「つねに仰せられる御詞ごご」にも「無量寿仏の名なを持て」という、この『観無量寿經』の句がありますから、經の心を、この一句に受けとっておられたものと考えられます。この經は、前の『無量寿經』が説く、阿弥陀仏の本願によって確立した浄土に対して、凡夫でも、いな、その凡

夫こそ称名により往生するということを示したものです。

浄土宗では、この中、第九の観は、阿弥陀仏のほんとうの姿と、念仏の衆生を救う御働きを説いているので、『仏身観』として日常誦しております。この中の「光明はあまねく十方の衆生を照して撰取して捨てたまわず」の一文は、浄土宗の歌となった「日影のいたらぬ里はなけれども、なかむる人の心にぞすむ。」の上人の御歌によく現わされており、念仏一会の後の結びに誦します。『平家物語』は、上人の御一生と時代を同じくしていますが、上人の念仏の教を、平家方も、源氏方も、信ずる者多く、捕えられて首を斬られる前などに、高らかに、この文を唱え、十念して果てる様子が書かれております。定善の分類の中に入っている箇所ですが、以上のような意味で、称名念仏の立場として尊ばれております。

ついでながら申しますと、『平家物語』の女主人公、建礼門院とその付添の尼僧たちの最後往生を記して最終文に、この経の「韋提希夫人」になろうと往生したものとあることは、あの悲惨、無常の世を生きるものたちの支えとしての浄土宗の教、とくに、この凡夫、女人の救いを説く教が大きく働いたことを知るべきでしょう。

さて、このお経の註釈の文により、浄土宗が開かれたくらいですから、浄土宗の教からいうと三部経の中でもっとも

重要なお経ということになります。上人は、わたくしが浄土宗を立てる心は、念仏により凡夫が浄土に生れることを明かすためであるといっておられ、そのことがもっとも経文にはつきり出ているのはこの『観無量寿経』であります。したがって、『無量寿経』の第十八願では、五逆罪とか、仏法を謗るものは往生できないという但し書きが、経文では付いていながらもかわらず、『観無量寿経』第十六の観での、五逆十惡の愚人でも、南無阿弥陀仏と称えたと極楽に往生するとある考えによつて善導大師も上人も、第十八願を引用される時には、そのような但し書きは取った形で出され、『観無量寿経』の考え方が『無量寿経』を見ておられる。つまり、『無量寿経』では、まだ、戒律というものに拘わる所が残っているが、『観無量寿経』では、戒律も持てない罪深い人間性の強調がある。この面からしても明らかに、この経の方が、後出であることが知られます。いいかえると、往生を説くお経の中では、もっとも進んだ形、もっとも円熟したものということになります。法然上人は、経文の比較から、説かれた時代は『無量寿経』が先、『観無量寿経』が後とされていますが、同時に、右のような事情も踏まえての事と思います。

『阿弥陀経』は、阿弥陀、訳すと無量のいわれを説いて、

それは、浄土に住む仏様、弟子たち、往生した人の寿命が無限で、光明も無限であり、その浄土の国土建物も、無量の莊嚴に満ちていることをまず述べています。そして、その往生の方法として、一日乃至七日、一心に称名せよと示し、往生のまちがいないことを、六方の仏様方が大きな舌相を出している形で証明しているお経です。法然上人は、『観無量寿経』が定善と散善とに広く説かれているのに対し、この経は念仏だけを取り出して説くものであるから、純粹性の上からいうと、『無量寿経』（大経ともいう）、『観無量寿経』（観経ともいう）、『阿弥陀経』（小経ともいう）という順となる。そこで、上人は、浄土宗の根本聖典である『選択本願念仏集』という書を書かれるまでのいく度かの御著書も、すべて、三部経の研究の講義、解釈であるが、その順は、この順序の大・観・小となっている。歴史的には、大・小が古く、観は先に述べたように後であります。『阿弥陀経』は、六方の諸仏の証明と守護について後半述べているところが特色であります。これらは何だか、經典の裝飾的な拡大の一こまと見られがちですが、念仏の教は、まさしく、そのように各処に、榮え、生きてきたことからすると、六方の仏様が、念仏往生の永遠性、力強さを二千年もの前のこの経で述べていることは、真実としかいようがないではありませんか。今後もし

うだと信じます。この経は、浄土宗の法要には長さも適當といふこともあってか、よく誦されております。ふつうの速さで十分位ですみます。また写経にも使われ、上述の善導大師は、十万というたいへんな写経をされたといひ、一部は今日も残っております。

以上のように浄土三部経を法然上人が決めました、が、上人はさらに、この経の内容は、阿弥陀仏、釈尊、諸仏方によつてすべての中から選択され、すぐれたものと説明されていいます。これも、上人独自の尊い表現で、自己を捨て、ただ仏のえらばれた教によつて生きる還愚痴の聖者法然上人の心が明示されています。実をいうと上人御自身も、一切経を学ばれても、一文不知の身となつて、ただ一向に念仏の道を選ばれたのです……。

今日、幸にも、法然上人の御示しにより、私共は、三部経、別して、浄土宗として大切な所を、迷わず信仰の糧として用いることができます。三部経全部を日々読むことはできませんが、上記の、各経の所で申しました、前の二のそれぞれの経のダイジェストというべき、『四誓偈』、『仏身観』と『阿弥陀経』とを誦し、その意味とか、相互の連関を考えながら法然上人の、御指導で、念仏生活を全うしたいものであります。

浄土宗の信仰と生活



浄土宗に伝わる民俗的信仰

中村 康 隆

法然上人が後白河法皇の臨終の善知識をなされるに当り前もって御仏を渡し奉ったと御伝記にあるのは、多分枕元にかざる来迎仏だったと想われる。三尊来迎または二十五菩薩来迎の図は民衆の深い浄土往生の願望から数多く製作されたもので、中でも知恩院の「早来迎」図は傑作とされている。法然上人の時代にはこうした来迎図を臨終の枕頭に掲げそれに向って称名裡に往生を遂げようとしたのであった。この風習は後には真言地帯の十三仏同様死後にまつるようになり、や

がて途絶え勝ちになったが、それでも近江や四国の一部にはなお永く来迎仏をかざる習しがあった。近年また取手や清水など心ある寺の手で再び枕経に来迎図をかざって通夜説法の一助とする風が復活している。

この来迎仏の信仰はまた二十五菩薩練供養の興行として各地に行われ、現在でも京都東山即成院と岡山県牛窓弘法寺（真言）、大阪平野大念寺（融通念仏宗）、和歌山県有田得生寺（浄土宗西山派、五月十三、四日）の外、岡山県美作誕生

寺（四月十九日）、奈良県当麻寺（五月十五日）、東京都九品仏（四年毎）などの浄土宗の著名寺院でも伝えており、民間芸能ブームにのっているようである。そしてこの練供養に加わることは、唯に往生極楽の願からだけでなく稚児行列同様その身の健祥を祈るためとされている。当麻寺は中将姫が蓮糸で織ったとされる浄土曼陀羅の繡帳で有名だが、またその背後の二上山の落日を拝して願生浄土の念仏を唱えるいわゆる「日想観」の行われたところに寺が創建されたりしく、練供養もこの落日を背景に演出されている。日想観では大阪四天王寺の石の鳥居を通して難波の海へ沈む日を彼岸の中日に拝む習わしが著名であるが、伊豆南端の子浦と妻良の境の峠から落日を拝して海難の諸精霊を慰める彼岸念仏が行われているなどは正しくその遺風であらうし、また各地で「日の伴」などと呼ばれて彼岸や社日に行われる石の鳥居の七とこ詣りとか、六阿弥陀・六地藏・六観音の巡拝など同じ名残りで、いづれも行者の健祥を齎らすとされている。美作の誕生寺はいうまでもなく法然上人生誕の聖地で、その七不思議の一つに片目川に住む片目の魚があるが、民俗学者柳田翁は昔いけにえの魚を片目にして飼育した名残りの伝説としている。奥沢の九品仏はお面かぶりと俗称されている。

こうしてみると仏教的な諸行事も案外民俗的信仰にささえ

られて行われているものが多い。念仏の興行にしても、元来は弥陀の引接、往生浄土の願行であるが、民俗上ではむしろ災厄を祓い現世の幸を祈る点に重きがおかれやすい。浄土宗六大本山の一つ京都知恩寺は百万辺の数珠繰りで有名だが、それは十八世善阿のとき後醍醐天皇の命で元弘元年七月大地震後の悪疫流行の鎮撫にこれを修して効験顯著として寺名を百万辺と号しました弘法大師自筆の利剣の名号を賜ったとされ、爾後も再三厄除けに修せられ、今も同じ心持でこれに加わる人が多い。元来百万辺の念仏は道練・迦才らの中国浄土教家の勧められたもので、わが国でも平安中期以後盛んになり、始めは一人が一七日または十日を限って念仏百万辺を唱えたが、後には千八十顆またはその倍数の大念珠（五・八・十・二十疊繰りなど）を十人またはそれ以上の人数で一顆一唱して総和でも百万辺（略して実數十・二十万でも）とするもので、俗にざらざら繰りともいい、慰霊追善の外、虫送り・雨乞い・五穀豊穰などの農耕儀礼や悪疫退散の祈願などに広く行われている。また葬儀の晩や通夜とか彼岸・盆などに念仏講の老婆連が百万辺を繰るところも多い。

上代の人々はこの世の災難や悪疫などを霊のたたりと目したように念仏はそれらの霊を慰めなだめる有和鎮送の最勝の方途として、六斎・双盤・踊躍・大念仏など様々な形態で広

く民間の信仰行事にくいこんでいる。鎌倉の光明寺も大本山の一つだが、三浦半島近在の信徒たち（鉦講・念仏講）を多数集めての双盤念仏を中心とする十夜法要で有名である。もともと京都真如堂のそれを第八世観誓祐崇上人が後土御門天皇の勅許により浄土宗の法要とされたもので、今でも十月十三・四・五日の三日間盛大に催され、この十夜を終えてから三浦半島一帯の秋祭りが始まるのである。十夜は元来冬の初めの十月満月祭で、一月十五日の上元、七月十五日の中元に並ぶ下元の新穀感謝祭をかねての祭典であつたものが、仏教にとり入れられて真言・天台の寺々で行われ、更に浄土宗の恒例法要となつたもので、同じ十月の民俗行事である亥の子や十日夜の習俗ももとはこの下元の祭りの残片なのである。

話は変わるが次に善光寺信仰にふれておきたい。善光寺の光三尊の阿弥陀如来は日本最初の仏体として広く尊崇され、殊に浄土宗大本山とされる大本願の尼公上人の存在は日本での仏寺の最初の奉仕者が女性であつた姿を示しているかのようである。この善光寺の関伽井の水が諏訪湖に通じ更に桜が池にも通じていると信ぜられるのも、善光寺仏が農民の生活を支える農耕守護の仏と仰がれたことの証左でもある。善光寺の裏山は霊の集まる山と見られているが、それもあつてか丁度出雲が神々の集まるところとされると対照して、ほと

んど全国的に人間が死ぬとすぐ善光寺詣でをしてくるとされていて、それだから枕飯・枕団子はその弁当にするのですく作つてあげなければといわれる。死ねば阿弥陀仏の引接、つまり救いの導きにあづかるとの素朴な民俗信仰が、日本最初の弥陀三尊仏の祀られる善光寺に魂の故郷を見出してこうした俗信となつたものであらう。枕飯をそれで道飯と呼ぶところもあるが、一方にはこれを落着きのお仏餉さまというところもあつて、本来は肉体から遊離した魂を呼び戻して客として迎えて即座に出す簡易な食物の意味だったらしい。それが善光寺詣でをそのまま死出の旅であるかに受けとり旅路の弁当と解するように変つたものであらう。

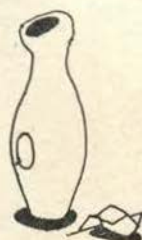
静岡県菊川の応声教院（浄土宗）も地方寺院には珍しい大伽藍を具え秋の彼岸中日には多くの講中が桜が池の「お檀納め」に団参する。応声教院は片葉の葦や懸谷衣かけの松など遠州七不思議で知られるがその一つお檀納めと寺室の竜の鱗には宗祖にまつわる伝承が伝えられている。法然上人の師匠皇円阿闍梨は入定時弥勒の出世まで竜身と化して桜が池に住され、宗祖もはるばる下向して対面され、鱗の中の寄生虫の苦しみを念仏しつつ念珠で蛇身を撫でてぬぐつてさし上げたと伝えられ、その竜身に新穀を奉獻する行事がお檀納めである。ところが桜が池の近在には今も九頭竜神社があり古くか

ら仏教的な竜蛇信仰が受け容れられていたらしく、その上全く同じ新穀を盛ったお櫃を湖中の竜神に献する儀式が箱根の九頭竜権現の行事として今も芦の湖の湖上祭に灯籠流しと並んで行われていることから、それが農民たちの営んだ古い水神（竜蛇）祭りに端を発するものであることは明らかであろう。この農耕に関する民俗的信仰は、三輪山の伝承を始めて、各地に残る薬蛇行事、縄引き行事とか、八岐大蛇神話と同類の蛇切り儀礼である鞍馬の竹切りや藤沼大善寺の藤切り

行事とか、その他各地の蛇の池、竜が淵伝説、更には道成寺伝説とも関連づけられ得る、古代の農耕民たちの抱いた古い蛇の神（夜刀の神Ⅱ谷の神）の信仰の仏教的潤色といえそうである。こういう古い竜蛇信仰と結びつけたのが皇円入定譚と宗祖による念仏解脱譚だったのであろう。

その他民間念仏信仰には数多くの話があるが、今は紙面の関係で法然上人ゆかりの地と大本山の若干について述べるにとどめておく。

念仏と生活



宮林昭彦

法然上人のおしえの特色は、いうまでもなく時機相応とい

うことである。実生活に即したおしえということが出来る。時代の認識は末法という受けとり方であり、その時代に生きる人間は罪惡生死の凡夫と観察するのである。末法とは、い

わゆる正像末の歴史観に立つ末法であり、救えのみが存在してそれを実践するものもなく、ましてそれによって真理を悟りうるものもない時代である。

法然上人が出られた時代は、天災や血なまぐさい戦乱の日々のなかで、まさに五濁惡世の末法の時代であった。この時代認識は、ただ単に法然上人の個人的な体験からわりだされた受けとり方ではなく、その時代を越えていつの時代でも末法と受けとめるところに時代に対する深い洞察がある。末法とは現代ということもできる。人間が生きているその時代はすべて末法である。末法という受けとり方のなかにこそ現代への反省が生まれてくるのではなからうか。

現実のすがたを末法と認識する――末法澆季、濁惡の世界ととらえることこそ、そこに現実生活の反省を生む根源となる。現実のすがたを皮相的に極楽世界とみているかぎり、現実の極楽世界を見たり味うことはできない。むしろ現実のすがたに地獄絵をみるからこそ肝心なことである。一般的に日常の現象的なすがたをみるとき、身近かな公害問題一つをみても、空気や、海や山の幸は人類を、いなすべての生物を生み育ぐ大自然の恵みであった。しかし、いまや機械文明は、自然を破壊し、空気は汚染し、自然の宝庫である山や海もけがされ、それによって人命もおびやかされ、やがて人類

破滅の危機さえ感じられる現実のすがたである。

近世における機械文明の発達は人類にこよなく進歩と発展をあたえ、人間生活に欠くことのできない便利さと利益をもたらした。その反面、人間はかけがえのない生命の不安におびやかされていることも事実である。原子科学の発達は、人類にすばらしい創造的な夢をもたすが、しかし、現実には戦争という最悪の状態がもし出され悲劇がくりかえされている。人間自身が自縄自縛の状態に追いこんでいるのが現実のすがたである。

この現実の矛盾相剋のすがたをみきわめて人間のあるべき本来的な生き方をもとめられたのが法然上人の生活に対する基本的姿勢である。

二

法然上人の生活に対する態度は、仏とともに限りなく生きぬくことであり、人生を念仏生活によって貫くことが基本的な姿勢である。

いうまでもなく、念仏をはなれて阿弥陀仏もなければ浄土も存在しない。これは、すべての生きとし生ける衆生の願いをうけて、阿弥陀仏が全身全霊をうちこられたのが四十八願

であり、この四十八願の帰結するところが御本願といわれる十八願である。この十八願の実体は、「称我名号」である。

これは南無阿弥陀仏と称えるところ、いつもみ仏とともに生きる力がそなわり、み仏とわたくしの上に生命のふれ合いが感じられるのである。

称うれば、ここにいなから極楽の

聖衆の数に入るぞうれしき

法然上人のこの境地は、み仏さまにいだかれてなんの不安もない安心の世界のなかに生きる究極のすがたを詠まれたものである。

阿弥陀仏の全生命が打ちこまれた念仏であるから、方便の念仏でなく、絶対的な価値をそなえた生命の念仏である。生命の念仏であるから、念仏を唱えることによってわたくしたちの日常のさまざまな生活行為は、すべて大生命の阿弥陀仏に帰一され、生活そのものも生き生きと躍動するのである。すべての生活が、ひとたび南無阿弥陀仏のなかに統合されると、そこには大らかな生活がくりひろげられるのである。

「人の命は食事のとき、むせて死することもあるなり。南

無阿弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」

このご法語は、いつどのようなすがたで、この世と別離していくかわからない、はかない無常の世において、かかすこととの出来ない三度の食事に対する心得を示している。人間の生命は、逞しい強い面と、考えられないような柔らかい面をもっている。食事ぐらいと考えがちだが、命とりになりかねない場合がある。あたりまえの三度の食事もおろそかにせずに、数かぎりない生きものの命の恩恵にあずかって、このわたくしの生命が保たれていることに気づき、感謝のなかに一椀の飯もいただくかねばならぬことを示している。それは念仏のなかにいただく一椀の食事には、無限の生命のはたらきがあるからである。

「現世をすぐべきようは、念仏の申されんようにすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくは、なんなりとも、よろづをいとい捨ててこれをとどむべし。衣食住の三は念仏の助業なり」

このように、日常の家庭生活が社会行動においても、一度真実の念仏へ統一づけられた場合には、いずれもみな助業と

いわれる。真実の道を求めるために、体を大切にすること
も、そのまま念仏の助業となるわけである。

仏とともに生きていく確信のもとに、生命の念仏が申され
ると、一々の生活行為もおのずからきよめられていく筈であ
る。かように生活の原理が定まったときには、さまざまの生
活様式にとらわれることなく自由なすがたで、ひたすら念仏
生活することをすすめられておられる。

三

「さけのむは、つみにて候か。答う。まことにはのむべく
もなければ、この世のならい」

なんと、おおらかなみ教えであらうか。ものの本質、人生
の根本の真実をおさえていけば、外面的なかたちにとらわれ
ることなく、すべてのものが価値づけられ意義づけられてい
くのである。

「仏の御ちからは、念仏を信ずるものをば、転重軽受とい
いて、宿業かぎりありて、おもくうくべきやまいを、かる
くうけさせたもう。」

現代の世の中は、医学や科学の進歩によって難病も治るよ
き時代になったが、しかし病気になるなくなったわけでな
く、また病人がなくなったわけではない。やはり病いに苦し
む人も多く存在するのである。生老病死の四苦は人生苦であ
り、釈尊が説かれたように、だれでも免れることはできない
運命苦である。人の受けるべき病氣にも免れない必然的な
ものと、注意すれば避けることのできるものがある。宿業か
ぎりありて受くべき病は、いかなる仏神に祈っても、それは
無効であらう。もしお祈りして病いも死も延ばすことができ
るとしたら、世のなかに死ぬ人はいないはずである。しかし、
み仏の力は、念仏を信ずる者は、転重軽受といって、宿業か
ぎりあって重く受ける病をば軽く受けさせてくださるのであ
る。

これよりも重く受くべき病をば
軽く受けさせたもうみ仏

かように、念仏の功德ははかりしれないものがあり、利益
をうけることができるのである。無量寿経に「この光りに遇
うものは、むさぼり、はらだち、ぐちの三垢が消滅して、身

も心も柔軟なり」と説かれているように、み仏の光明に照らされ、仏とともに生きてゆくことができれば、身も心も安らぎ、和顔愛語の生活に転入すとともに、すべての差別感が消え、平等性のなかに生きる平和共存の世界が展開されるのである。

さらに、法然上人は選択集のなかに、「念仏するところには、阿弥陀仏、観音、勢至等の仏菩薩が影のかたちに添うごとく護念したもうから、ながく諸悪鬼神の災障厄難をうけることなく、延年転寿の益までも蒙ることができると説かれている。ただし、法然上人の念仏の教えは、現実の利益をうけることが目的でないことは勿論である。それはただ念仏を

唱えて、無量寿、無量光のみ光に照らされて生きる身の上に自然にあたえられる積善の余徳なのである。

生けらは念仏の功つもあり、死なば浄土にまいりなん、とてもかくてもこの身には思いわずらうことぞなきとおいぬれば、死生ともにわずらいなし

死生ともにわずらいなく、今日一日を安心立命のなかに精いっぱい生きる生活が、法然上人の説かれた念仏のみこころであります。

四季おりおりの寺まいり



安居香山

お寺は、ご先祖の安住の地でありますとともに、われわれの心のふるさとであります。寺は法事や葬式をやる大切なところでありますが、その外にわれわれの宗教心を育て、はぐくむところであります。

日頃、多忙な生活に追い廻されて、ともすると私達は、自分を忘れ、自分の生命を忘れ、み仏や、ご先祖の力に助けられて生かされていることを、忘れ勝ちです。そうした時に静かな寺にお詣りし、円満相好なみ仏の前に坐るとき、どれ程心が休まり、そして清められ、私自身を取り戻すことでしょうか。機会あることに寺にお詣りし、清浄な環境の中で、人生を省みて頂きたいと思えます。

浄土宗の寺では、年間いろいろな行事が行われております。その中、お彼岸やお盆のお施餓鬼などは、比較のお詣りも多く、又よくご承知と思いますので、そうしたものの以外で広く行われている行事のいくつかを、お話してみたいと思います。

御忌（一月二十五日）

これは、浄土宗をお開きになりました法然上人のご命日にあたる一月二十五日に行われる法要をいいます。

法然上人は、建暦二年（一二二二）正月二十五日に、お年八〇才をもって、お念仏を申しつつご往生をされました。最後のご遺言ともいえる一枚起請文に、建暦二年正月二十三日とされるされていることは、皆様もご承知と思いますが、それから二日後にご往生になっているわけです。

御忌というのは、もともと天皇皇后の御忌日のことをいうのですが、大永四年（一五二四）後柏原天皇が勅許せられて以来、浄土宗では、法然上人のお命日を御忌といい、寺々では報恩の誠を捧げながら、別時念仏会を行ない、上人のみ教えを改めて頂くと共に、念仏精進に励むお詣りをする事になっていきます。

総本山の知恩院や大本山各寺でも盛大に行われますが、季節的には花咲く三月から四月に行うようになっていて、知恩院では、四月十九日から一週間盛大に行われ、京都の大法要の中でも、有名なものの一つとなっています。特に今年は、浄土宗開宗八百年記念ということもあって、四月中、三週間にわたって大法要がくりひろげられ、上人のお徳をしのぶことになっていきます。

善導忌（三月十四日）

お寺の正面には、阿弥陀様をお祀りしますが、正面に向って左側に法然上人のお像を祀り、右側に善導大師のお像を祀るのが、浄土宗の本堂のお飾りの型になっています。

この善導大師というのは、中国の唐の時代の方で、浄土の教えを広められた尊い方です。そして法然上人は、この善導大師のお経の注釈書である観経疏かんぎょうしよに説かれている一節に、ハツと思ひ当るところがあつて、浄土念仏のみ教えを開かれたのであります。それは決して生易しい努力でなく、求め求めて、やっと辿りつかれた結論への手引きでありました。

その教えは、「時と処をとわず、一心に弥陀の名号を唱えれば、必ず往生ができる。仏の本願に順うことになるから」であるという極めて短いものであります。この短いヒラメキが、実は宗教的開眼ともいうことになるのでしょうか。法然上人は、それ以後、専修念仏の行に入られたのであります。

善導忌は、この善導大師のご命日の法要であります。春なお浅い寺々での法要は、お説教なども交えて、ねんごろに行われます。

お十夜じゅうや（十月十五日）

この法要は、浄土宗独特のもので、十日十夜別時念仏を行

って、お念仏の功德くどくを頂くものです。無量寿經に、

「ここにおいて、善を修すること十日十夜されば、他方諸仏国土において、善を為すこと千歳ならん」

とあることに由来しています。われわれは、日頃そうは思っていない、なかなか善を修め、悪を止めることは難しいものです。人間の弱さといいますが、凡夫のはかなさとも申しますか、悪いことはいとも簡単にできますが、よいことは、できないものです。

そんなわけで、せめてこの時期に、十日十夜寺に籠り切つて、お念仏をし、修善にはげむことが、必要なわけです。そうすることは世間で、千年も励んだことに匹敵するとお経に説かれているわけです。これを信じ、このお十夜の法要を、いとなむわけです。

勿論この頃では、社会生活が変ってきて、十日十夜も寺に籠っているわけにいきません。そこでせめて一日でもと、どこのお寺でも一日だけのお十夜法要を行い、お食事供養しながら、一日念仏にはげむことにしています。又日時も十月十五日と限らず、お寺の都合のよい時に行われています。

鎌倉の大本山光明寺でのお十夜は昔から有名で、今でも盛大に行われていますが、各寺々でも、広く行われている法要です。お念仏にご縁を結ぶよい機会でありますので、是非ご

參詣をして頂きたいと思ひます。

お身拭い式（十二月二十五日）

今まであげた法要は、地方の各寺々で行われている法要ですが、ここで掲げましたお身拭い式というのは、京都の総本山知恩院で行われる、いとも莊嚴な、そして有り難い法要ですので、ご紹介しておきます。

これは、いうなれば年の暮れも残り少なくなった知恩院での大掃除の行事として、法然上人をお清めする法要であります。ご承知のように、知恩院の大殿は、御影堂みえいどうといつて、法然上人のお像を祭るお堂が、七堂伽藍の中心となつています。このお像は、法然上人自から開眼せられたと伝えられる由緒あるのもで、誠に尊いお像であります。

当日はこのお像を、お厨子の中からお出して、ご門主始め

執事長以下が、一年間の塵をお拭いすることになっていきます。あの広い大殿には、お堂一杯の參詣者が、木魚を叩いてお念仏申す中で、このお身拭いが行われ、まことに感動的な情景となります。大念仏の声は、お堂からはじき出されて、華頂山の峰々に響いていきます。念仏のみ教えが、今ここに生きている喜び、一入感ずるものがあります。

知恩院の山の一年は、このお身拭いの法要が終つて暮れていきます。そして、あの八百貫の大釣鐘がいんいんと東山の間に響き渡るころ、新しい年の歩みが、砂利を踏む音と共に、近ずいて来るのであります。

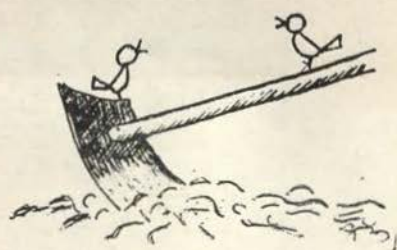
申すまでもなく、知恩院は、法然上人の靈廟の地であり、浄土宗の祖山であります。念仏のみ教えも、この祖山を中心として、波紋の広がるように、全国の津々浦々に広がっていくのであります。

浄土宗の信仰と生活

浄土宗の流れ

念仏山を下る

佐藤成順



△▽

仏教の信仰・思想が流布するには、そのもとになって
いる仏典が必要である。浄土宗の根本聖典として尊つと
ばれる『無量寿経』や『観無量寿経』や『阿弥陀経』、

そして、曇鸞大師の『無量寿経論註』や道綽禪師の『安
楽集』、善導大師の『観経疏』など、浄土宗の大切な仏
典は、奈良時代には、すでに、日本に伝わっていた。ま
た、阿弥陀仏を信仰する人もいたし、西方浄土に関心を
もって学問的に研究する僧もあった。けれども、奈良時
代の浄土教は、經典の書写や、学者の解説や、未組織の

一部の人の信仰に止まってしまい、後世の浄土宗や真宗につながるものではなかった。念仏が実践され、後世の浄土宗や真宗が花開くものになったのは、比叡山に起った念仏の実践である。それは平安朝中期のことである。

中国で天台宗を開いた天台大師智顗は、『摩訶止観』という著述のなかで、僧侶の実践として、四種三昧の必要を説いた。四種三昧とは、心を一つの対象に専注して正しい智慧を得るための四種の実践方法である。天台宗の道場、比叡山には、その四種のなかの常行三昧を実践する常行堂が建立された。常行三昧は、『般舟三昧經』にもとづいて、禪定に入って正しい智慧を得るために、九十日のあいだ阿彌陀仏のみ名を唱えながら、堂内の仏像のまわりを歩きめぐって、心を阿彌陀仏に集中する行である。この常行三昧の本来の目的は、正しい智慧を得るため禪定三昧の境地に進むことであるが、その実践道場として建てられた常行堂が、念仏化したのは、慈覺大師円仁のときからである。

円仁は、唐に渡って、その当時、五台山で行なわれていた五階調の音調をつけて唱える五念仏を導入して、常

行三昧に替えて実践したので、常行堂は、次第に浄土教的色彩が強くなり念仏道場化した。

叡山の念仏は、「山の念仏」とも呼ばれ、山上の僧ばかりでなく、在家の人々、とくに、京都の貴族たちから親しまれ、藤原道長をはじめ貴族たちは登山して、山の念仏に参加した。山の念仏は、山を下って、次第に都の方にも広まり、あちこちの寺院でも行なわれるようになった。藤原貴族のなかには、みずから阿彌陀堂を建立する風潮が盛んになった。西方浄土、さながら現世に移したような美しい阿彌陀堂を贅をつくして建立し、そのなかで、静かに浄土の観想にふけた。道長の法成寺の阿彌陀堂をはじめ建立の記録は多く、今日なお、日野の法界寺、宇治の平等院などの遺構を通して、往時のその優雅なムードを追想することができる。

浄土教には、本来、芸術的・文学的な要素をもっており、とくに、高度な文化を豊饒した唐代に発達した浄土教にはその傾向が濃く、美的な要素が平安貴族の趣味に合い、浄土教がかれらに受け入れられていった。

現世の榮華を来世でもまたきわめたいと願い、あるい

は、理想境としての極楽の生活を現世に満喫したいと願う平安貴族の趣味的な美の宗教は、教養にも財産にも貧しい凡夫の救いを真剣に考える法然・親鸞の浄土教とは趣を異にしているし、また、かれらが、念仏だけを信奉していたのではなく、天台宗の根本聖典である『法華經』を誦誦していた。こうした信仰の型態を、「朝題目（法華）、夕念仏」と呼び、当時の一般的な風潮でもあった。けれども、そうした浄土教が鎌倉時代の浄土教の基盤となったことはたしかである。そして、鎌倉時代の浄土教が生れるまでには幾人もの指導者が出て、すこしずつ方向を定めていったのである。

△二△

こうした浄土教の流行のなかで、指導的な役割をはたしたのは、まず、叡山横川の恵心僧都源信であった。源信は、美的に流れる当時の浄土教に警醒を与え、世相と人間の本性をみつめ、混乱と汗濁のひどい末世の今日、自分のような愚かな人間の指針となり得る仏教は、往生

極楽の教えと、その実践の外にはない、極楽に往生するために念仏の実践がもっとも重要である、との信念に立って、寛和元年（九八五年）、『往生要集』三巻を著わして、浄土信仰を鼓吹した。

『往生要集』の業績は、まず、常行堂で、そして京都で流行する念仏と浄土信仰を、仏教学の上から説明し、教義上のうらづけを与えた点にある。また、源信は、天台宗の学僧であり、『往生要集』が天台宗の学問を背景とていることは当然であるが、それと同時に、新しい世界を求めて、道綽善導の、とくに善導の教えに注目し、それを積極的にとり入れた。道綽善導は中国唐代に出た浄土教の大成者であるが、日本の仏教界では、当時、まだその思想は勿論、名すらほとんど知られていなかった。いわば外来の新思想であった。源信が善導の思想を取り入れたことは平安仏教界に新風を吹きこんだことにもなった。新思想という面で、従来の仏教に耳なれた知識人たちの心をとらえたということもあったかもしれない。とにかく、源信が日本に善導を紹介したことは、浄土宗の成立に重要な意味をもつに致り、浄土教の

歩みの上で忘れることができない。

また、われわれ日本人には大なり小なり地獄・極楽の観念がうえついているが、日本人の精神生活に地獄・極楽の観念が定着するようになったのは『往生要集』に由来する。

△三▽

偉大な宗教家の思想は、時代を超えて生命をもち影響力をもつ。『往生要集』が世に出てから二百年を経たのち、その思想は成立当初にも増して、再び大きな影響力を放った。時代は過ぎたが、源信がこの書を著わしたその同じ叡山で、いまの世と人に即応する仏教を真険に求めなやんでいた一人の若い求道僧の心をとらえ光明をともした。その若い求道僧法然上人源空は、『往生要集』を何度も心ゆくまで味読したことは当然である。「一期物語」には、『往生要集』を先達して浄土門に入るなり」と上人のお言葉を伝えている。上人は、『往生要集』を先達として浄土の門に入り、善導の思想によって浄土

教義を確立した。いいかえれば、『往生要集』を通して、善導に接することができたのである。

『往生要集』の念仏は、念仏が末法のときにふさわしく、実践し易く、勝れていることは強調しているが、仏の姿を観想したり、ものの真実のありかたを証得する「観念の念仏」が勝れ、阿弥陀仏のみ名を唱える「口称の念仏」はそれより劣るという考えかたが支配的である。また、念仏と他の実践行の併修を説いている。上人は、そうした傾向に満足できず、口称念仏を最勝の行として顕揚し、念仏行を専修すべきであると考えた。結局、上人は、『往生要集』を手がかりとしながら、次第に善導に傾倒していった。

上人が短い期間ではあったが、南都を訪ねたことが、上人の思想形成の上に大切な役割を果たした。当時、南都には、華嚴法相三論などの学問が伝わっており、諸宗の学匠と語り合うことができたし、とくに、南都には中国の浄土教家の著述があり、すでに、この地で、約百年前に、三論宗系統の僧、永観律師が『往生十因』おとこしやうじんを著わして念仏信仰を説いていた。上人は、『無量寿経釈』のな

かで、禪林寺の永観は、道綽・善導の意によって『往生十因』を作って、往生の行因には、永く諸行を廃し、ただ念仏の一行を提唱した、と永観を、道綽・善導の意を汲んで念仏一行を提唱した先驅者として尊敬している。上人が感涙にむせり、回心を決定したとまでいう『散善義』の「一心専念弥陀名号……」の文に接することができたのも『往生十因』によってである。

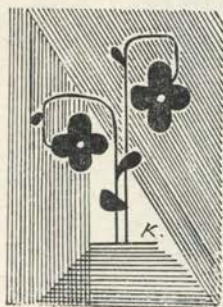
法然上人は、『往生要集』で、曇鸞・道綽・善導の教えに接し、さらに、『往生十因』で、その核心にふれ、そうした先輩の啓発を受けて、みずからの信仰と教義を大成する。

老若、男女、貴賤、賢愚を問わず、だれでも実践でき、すべての人が仏の慈悲の恩恵にあずかる仏教は、現在の南都や叡山の既成仏教の説いたように阿弥陀仏の本

願によって救われるしかない、一向専修の教えしかない。上人は、この確心に到達した。そうなる、もはや天台宗の根本道場である叡山に身をおくことは困難になってきた。上人は山を下る決意をした。十三才のときから三十年間を過し、人間的にも学問的にも育ててくれた第二のふるさとともいえるべき叡山を去り、十八才のときから師事し生活をともしした師の叡空上人とも意見が衝突し黒谷を去って京都に移り、自己の信仰にかなった新しい宗教活動に専心した。黒谷を去る上人の胸のなかにはいろいろな情感があつてであらう。

叡山での修道生活のなつかしい思い出と叡山に対する絶望とが交差し、これから身にふりかかる困難を考えながらも希望にもえて京都に向う。この下山によって浄土宗は誕生した。

日本浄土教の展開



佐藤行信

法然上人の門弟は僧侶貴族および武士から庶民にまでおよんでいます。隆寛律師（多念義、長楽寺派）をはじめ、浄土宗の第二祖聖光房弁長（鎮西派）、成覚房幸西（一念義）、親鸞（浄土真宗）、善慧房証空（西山浄土宗）、覚明房長西（九品流、諸行本願義）、一遍（時宗）、法蓮房信空、正信房湛空、安居院聖覚があり、また法然上人の感化を受け念仏に帰したものに、天台座主顯真、慈円等があり、法然上人の信者には、九条兼実、藤原実宗、平基親、宇都宮頼綱、熊谷直実等があります。中でも二祖の聖光（一一六二—一二三八）は筑前の人で一一九七年（建久八）に上洛して法然上人に師事しました。そのとき上人は六十五才、聖光は三十六才でした。そして翌年には選択集の付属をさずかり、一二〇四年（元久

元）浄土宗の正統を伝えられ、故郷筑前に帰り、筑後に善導寺を開いて念仏道場とし、肥後の往生院で浄土宗の主流鎮西義を確立されました。聖光の門弟の中から、鎮西派の正統をつぐ浄土宗第三祖良忠が出たのであります。

良忠（一一九九—一二八七）は石見国三隅莊、現在の島根郡の生まれで、十三才のとき出雲の鰐淵寺がんえんじで出家して天台、俱舍、法相、禅学、戒律を学び、一二三六年（嘉禎二）九月筑後国上妻の天福寺に聖光を訪ね門弟になりました。そして翌年四月十日には授手印を授けられ、また八月一日には血脈相宗伝の手次を授与されて浄土宗第三祖として法灯を受け継ぎました。以後十年ほど安芸地方を教化しましたが、一二四七年（宝治元）上洛、

ついで信濃の善光寺に向い、さらに関東に至り、上野、下野、武蔵、常陸、上総、下総を教化して、一二四〇年（仁治元）鎌倉に入りました。良忠は下総にいたころ、荒見弥四郎や椎名八郎などの小池頭が外護してましたが、土地のことで争いが起つたので、鎌倉に慈恩房を頼って入って来ました。慈恩房は良忠を伴って大仏勧進聖の浄光を訪ねたところ、浄光は一字の坊を造って良忠を住まわせてくれました。良忠に従っていた雑人等は鎌倉で商売を営みながら生活していました。そのうち北条氏の一族大仏朝臣（北条）が良忠に帰依するようになり、佐介谷に悟真寺を建立して開山とさせました。時期は不明ですが、この悟真寺を光明寺と改め、現在の材木座に移転しました。勿論良忠在世中のことではありません。なお良忠は関東に前後二十九年おり、東国に浄土宗の基礎を確立した功績はまことに大きいのであります。そして、法然、聖光と相伝した法門は良暁に授けています。光明寺は良忠門下六派の総本山でありましたが、六派とは京都の三派、一条流の礼阿然空、三条流の了惠道光、小幡の良空慈心と関東の三派、白旗流の寂恵良暁、

名越流の良弁尊観、藤田流の唱阿性真であります。なお白旗流の良暁は良忠の実子であります。また白旗、名越という名前も両人の居所から起つたものであります。う。

良暁は一二五四年（建長六）父良忠が下総にいたころ生まれ、一二六九年（文永六）に比叡山の仙暁の弟子となり、翌年出家しています。一二七二年（文永九）良忠が大病を患って病床に臥したとき、良暁は呼びよせられ、一二七二年正月十六日に、鎌倉の悟真寺の敷地と大仏朝臣（北条）の子上野介時遠が父の菩提のために寄進した水田を良忠から譲与されています。良暁の門弟には、定慧、蓮勝、智演等がいました。定慧は一二一四年（正和三）八月に授手印（附法状）を受け法灯を継ぎましたが、のちに良順に譲りました。この定慧、了専とつづく法流は、鎌倉光明寺を中心として伝承されたので本山伝といえます。蓮勝は一二二〇年（元応二）四月に良暁より附法状を受け、のち佐竹義重の家臣田中越中守の帰依を受けて常陸国太田に法然寺を開き、その法流は常陸にいた了実、聖岡へと続き末山伝と呼ばれています。

また智演は入元して廬山に登り、慧遠の旧跡を訪ね、白蓮社の遺風を学んで帰国し、摂津国の堺に旭蓮社を建立し念仏を弘めました。蓮勝の弟子了実は一三三〇年（元徳二）六月附法状を受け、一三五八年（延文三）太田城主佐竹義敦の外護のもと瓜連に常福寺を建立しました。その了実の弟子が聖岡であります。

聖岡は一三四一年（暦応四）常陸国久慈郡岩瀬に生まれました。一三四八年（貞和四）七才のとき瓜連常福寺の了実の弟子となりました。一三七八年（永和四）十一月に附法状を授けられました。一三九七年（応永四）に授手印伝心鈔など一連の伝法に必要な基礎資料の七巻書を撰述しましたが、これらは聖岡が良忠以来口伝（附法）によって伝承されたものをまとめたものであります。聖岡は一三八六年（至徳三）了実の没後常福寺の住職となりましたが、一四一五年（応永二）常福寺の住職を弟子の了智に譲り、江戸小石川の庵に入りました。これが伝通院の前身であります。この聖岡は宗脈と戒脈を伝受

する方法や僧侶養成の方法等浄土宗教団の組織を強化する教学の体系のため多くの書物を著述しました。この聖岡の主張した伝法を五重相伝といっています。このように教団の組織化に努力して一三九五年（応永二）には白旗式条（浄土宗白旗流義相承制誠状）を制定したりして、聖岡は白旗派を中心に確固たる教団を確立しました。

関東十八檀林は、徳川家康が浄土宗学問所として、鎌倉光明寺を第一、江戸伝通院を第二というように次第に設けたもので、十八檀林の全てが出そろったのは十七世紀半ばであったようです。この十八は弥陀の第十八願に則って定められたとも云われています。檀林は談林とか談義所という意味で、多くの学僧を擁していました。鎌倉以降禅宗に流行しましたが、のちに各宗に創設されました。ここで養成された学僧が外に出て寺を建立し、檀林と本来関係を結ぶようになります。これは徳川時代の浄土宗僧養成所であります。

浄土宗の流れ

世界の仏念



—浄土宗寺庭婦人会長—

対

一作 家—

佐藤 治子

談

武田 泰淳

深きえにし

佐藤 私、開宗八百年を迎えるにあたって、寺庭のものとして考えなければいけないと思って二、三年前から毎朝、元祖大師のご法語を拝読しております。なかなか難しいお言葉なんですけれども、その中でもいつも感激しますのは、「いかなる宿縁にこたえ、いかなる善業によりてか」ということなんです。こうした機縁で話をうかがうのも、いかなる宿縁によるのかということを思うんです。この前私が「法然上人てえらい方ね」といったら、武田さんが「今更なにをいうか」とおっしゃったことがあります。この頃法然上人のえらさを日々感じているのですが、武田さんの考えていらっしゃる法然上人について聞かせていただきたいと思っています。

武田 僕はやっぱり、父親の好きだった人間という意味で法然上人が好きになったわけなんですよね。だから自分の考えというよりも、お父さんの考えというのみ、最初は頭に入っている

わけです。それでね、お父さんは僕を育ててくれた人だし、その人のお寺に住んでいて、しかも浄土宗を信仰していたということですね。それはまず伝記や思想を調べるということなしにね。お父さんの好きなものは、僕も好きだという風なことを感じました。そのお父さんの好きだったお坊さんも、いろいろあったわけですが、毎日の勤行のときに浄土系の人の名前を印度・中国・日本とあげますね。竜樹菩薩、天親菩薩……それがやっぱり一番好きだったんだと、また子供としては考えるわけですね。やっぱり今でも考えてみると、自分で好きになる前に、その自分の父親によって好きになられた人が、好きになるということは、安全というか、結局そこに戻っちゃうわけですね。いろいろの宗派はあるけれども、お父さんの性格のなかに万分の一でも法然上人の性格を受けついでいるようなところがあると思うんです。

佐藤 そのお父様は大島泰信先生ですわね。先程のご法語に「釈尊の在世に、あわさることは悲しみなりといえども、教法流布の世にあうことを得たるは、これよろこびなり」とありますが、武田さんのお父様にお会いしたときには、法然上人のことについて一度も語ったことがなかったのです。それが寺庭婦人会のお仕事をさせていたでいて、法然上人について勉強させていただきながら、えらい方だなあと感激して

いるわけです。「量りしれざるえにし」とか「深きえにし」とかいうことを方々で申しあげるんですが、この法然上人のご法語を繰返すたびに、いかなる宿業によりてか、この善業によりては、ぶつかってくるのです。今日、何十年たった今、お父様のことを伺い、法然上人のお徳を偲ぶというのも、いかなる善業によりてかと、私つくづく感じます。そして全国を歩かせてもらって、月かげの宗歌をみんなで歌うとき、はるばる北海道の地をおもい、南の果てをおもって、いま此処にお念仏する処が自分の遺跡であるとおっしゃったことを、しみじみ考えるとき、感情的かも知れないけれど、何かホロツとするんです。

念仏は自己の新発見

武田 それはそうです。自分の特にとりたてて遺跡をつくらなくても、念仏の弘通しているところは遺跡であるとおっしゃったことは、まことに重視されていますね。その当時は、そんなこといって果して実現できるかどうかということは、法然上人のお弟子達でも危ぶんだと思ってます。しかしこれは正しかったのです。信念があって、その信念をやさしいことばでいったということ。仏教界はじまって以来のやさしい言葉で、分りにくいことはいわないうで、南無阿弥陀仏に帰一し

たといことが、混乱した時代のなかで、モットーというか、スローガンというかね。信念というものを最も分りやすい形で、まずお出しになったということが、とても大切なことだと思うんですね。佐藤さんは、法然上人のなかに一番心をとらえているわけですが。

佐藤　そうですね。私は一紙小消息を読ませていただくと、今でもごもっともでございますということですね。声が震えてくるんです。それを初めて読んだときは、涙が出て仕方がなかったんです。結局、ご縁ということをいうんですが、そのものずばりを法然上人がいつておられるんですね。私、最初光明会で、長年お念仏させていたんですが、そういう縁が廻り廻って、法然上人はお前もとお念仏申せとお授けになったと思うんです。それで、寺庭で勤行するときは、本をもつて歩いて読ませていただくんです。どれが一番といわれても困るんですが、なんとなく法然上人さまをお慕いせざるを得ないんですね。そのものズバリとはいえませんが、仏さまを信仰する気持が、法然上人さまのご法語を読ませていただいて、裏つけされたという感じですね。一番感激したのは、「うけがたき人身をうけて、あいがたき本願において……」ここなんです。人間が生をいただいても、めぐりめぐってこのようになったというのは、これは並々ならぬご仏縁だと

思うんです。しかも、このありがたくも法然上人のみ教えにあづかったんだから、一口だにも南無阿弥陀仏をおろそかにしてはいけないと思うんです。これは自分を認識しなおしてくださいださったということなんです。

武田　それはそうですね。つまり自分の本質を反省させるようなところがあるんですね。法然上人の教えにはそういうところがあるんですね。その結果どういう自分を発見するかということは、人によって違うんでしょうけれどもね。自分を新しく発見するということが、いかに難しいことであるかということ、南無阿弥陀仏ということばの中に含まれているわけですね。

全生活を念仏に統一

武田　僕はね、お父さんの話になるけれども。法然上人のお父さんは殺さんでしよう。侍であつてですね。その当時は、人を殺しても生きるということは、当前のことだったんですね。武士としては相手を殺すぐらいの勢いと強さがなければ存在できなかったんですね。それで法然上人のお父さんが敵によって殺されたのに、お前はかたきを打ってならんといわれた。それは法然上人の少年時代に強い刺戟を与えたと思いますね。敵を殺さないで、どうして武士道が成り立つ

かと思われたとおもうんです。そういうことをやり通すといことは、当時の武士階級にとつては裏切り行為であつて、何んというだらしない息子であるかといわれたに違いない。それにも拘らず、法然上人がそのもちつづけて、最後に念仏に達したといふことは、色々な苦しみをもっている衆生というものがいて、それが世界に充滿しているんだと。衆生を置いては仏教はありえない、ということに法然上人は知つていらつしやつたと思うんですね。だから、阿波介の称える念仏も、法然上人の称える念仏も違いなんんだ。自分は非常に苦しい学問をしてですね。万巻の書を読んだでしょう。一切經を何回も読んだといわれますから強い人には違ひないし、頭も非常にいいんだつたでしょう。しかし、その人がすべてのものを捨てたといふことは大変なことだと思います。今でも大学教授とか、学主号とか色々ありますが、それを捨てると云われても捨てられるものではありませんよね。名譽心とか、当時の上位者になりたいと思うのは当前ですよね。だけど法然上人は、自分が上位者になつてもなんにもならない。衆生が救われなければ、自分は救われないといふのは仏教の教えですけれども、そのときに、だから何にも分らない人でも、南無阿彌陀仏は云えるだろうといふことですよね。南無阿彌陀といふことを、キリスト教にしてみれば、アーメンと

いうことですよね。ごく単純なことのなかに深い意味を含めて、南無阿彌陀仏を称えなさいといふことをおっしゃっているわけでしょう。そのなかには、一つの絶望感があつたでしょう。それから楽天的な気持ちがあつたでしょう。両方救わなければならぬ。楽天的に生きてゆかなければならぬ。絶望的に苦しんでいる人も生きてゆかなければならぬ。その両方を南無阿彌陀仏によつて統一したということが、僕は非常に有難いことだと思ふんです。

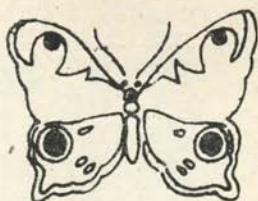
佐藤 本當に、その通りですね。お父さまの死を体験され、武士の子として、そのかたきをとつたかつたでしょう。小さいながらそうした思いで相當の悩み、苦しみがあつたと思ひますね。けども、それをふみこえて叡山にゆかれて、あれだけの修行されて、最後に報恩藏で藏經を五回も、六回も読まれたと、その努力ね、我れも人もともに救われるといふ、それがお父さんの遺言をかたく護つて、浄土宗を興される基礎の道を辿りたどつてあそこへ着かれたんだと。私は他の宗教のことは別として、他にみられない非常に得がたい宗教だと思ひますの。

武田 今開宗八百年を迎えるに當つて、こうした宗祖の心を、我々ほも一度考え、更に前進の糧としたいですね。

法然上人霊場めぐり

<特別霊場>

比叡山黒谷



青竜寺

村上博了

一

上人と青竜寺（釈迦堂）、八百年以前の物語りと知り乍らも、現在の事のように新鮮さとさわやかに打たれる。何故であらうか。上人の専修念仏が、人生を永遠に救うているからではなからうか、まして吉水の流れを汲む浄土宗専称念仏人として、上人の恩徳を忘れ去ることは出来ない。

環境は人を作ると云われるが、比叡山は京都東山三十六峰の最北端、山紫水

明、東に大琵琶湖と旭日を仰ぎ、西に王城地の上に、日没の莊嚴さを拝む、黒谷と云われるよう樹海の仙境は、生死出離の道いづこと、求道一路、至誠を傾ける、上人を陰陽に守られたのであった。而も釈迦堂あり、報恩蔵があり宋版一切經（大藏經）研究の便があったことは如来の庇護があったのである。

二

上人は十五才の久安三年（一一四七）二月十五日、大聖釈尊涅槃會に比叡山東塔源光の室に入り、四月八日の花まつりに功德院肥後阿闍梨皇円庵に移ったのである。皇円師は一山の法将雄才の法器であった。十一月八日戒壇院（法然堂）で大戒乗をうけ、皇円のすすめに従って天台三大部を修め、四教五時の廃立、三觀一心の妙理をもたされたのである。

久安六年九月十二日生年十八才、彼岸會に先立って西塔黒谷青竜寺釈空上人を訪ね隠遁した。この場合の隠遁と云うことは、名利をすて専心求道生活には入ることである。黒谷の地は根本中堂や大講堂の北々東に位置し、比叡山頂の東部にあって、比叡山の奥の院にあたる、報恩蔵（經蔵）のある点より見ても人煙より離れ静寂閑雅の靈地である。静かに研究するには最良の適地であった。

＜特別霊場＞ 青 竜 寺

浄土宗開宗八百年慶讃記念

(馬堀喜好画)



法然上人が修行され御開宗の決意をたれた図

—知恩院所蔵—

叡空上人は、大原の良忍上人附屬円頓戒正統伝持者であり、瑜伽秘密の巨匠として教界の雄才名僧であった。

三

上人が黒谷に蟄居時代を伝える記録は見当らない。しかし国宝である嵯峨二尊院絹本着色足曳き上人像、茨木瓜連常福寺所蔵上人像や東京芝増上寺所蔵残欠二卷上人絵伝、京都知恩院蔵上人四十八巻絵伝、東京田村彦七氏所蔵上人絵伝等に上人像を拝見すると、御手が大きくふしくれ立っていることは、単なる念仏時の撞木をとられたばかりではない、平生一生けん命に掃除等を、毎日欠かさずせられたことを物語る。

僧侶所化の修行は(一)掃除(二)勤行(三)勉強とすること現代も変わるところがない。上人は身すまいから自室諸堂庭までも、一心に清掃され、寸時を惜んで勉学に励まれたのであった。又上人の実家は保延七年三月夜討をうけてからは昔日の豪家の傍がなく、上人修学の資送りも充分でなかったらしい。上人は衣食を自から働いて自給され灯火もままならなかった大変に苦しい生活であったと拝察される。

上人は修行時代に病気をされたと伝えるものがない。黒谷は樹林の中、夏はむし暑く冬は身を切る寒さであった。暖ぼうもない、着物も薄気、足袋もままならない生活で、健康であ

ったことは、周到的な心構えと毎日の衛生に充分注意されたからである。

上人の性格は、その教団に武將あり天野四郎のような盗人あり阿波介、瑞松等の篤信者で構成されたことは、包容力あり、素直であり、こせこせしない、おおらかな心の持主であったからである。而も自身の生命を、預かりものと大切にせられたればこそ、叡山二十八ヶ年間を無事に送られたのである。自身の命を大切にすることは、又人々の生命を大切にすることである。一代八十ヶ年の御生涯で、上人が無理をせず命を大切にせられたことは随所に見られる。四国左遷の時数多の人々に心から慕われたことはその一例であらう。

四

黒谷時代の上人について、

偏に名利をすて 一向に出要を、求むる心切なり。これによりて いづれの道よりか この度たしかに 生死をはなるべきといふことを あきらかめん為に、一切経を披閱すること数遍にをよび

と伝えている。當時は元版麗版なく宋版一切経（大藏經）であった。国宝増上寺藏宋版一切藏又大藏經五千三百五十六箇五千八百四十七卷であつて、かような大部な經典は、何年かか

らなければ読破出来がたい、而も相ついで読了するものでなく、如來の本旨いづくにありやと含味し苦心研究されたのである。余談ながら増上寺宋版大藏經補修を昭和三十四年から四ヶ年がかりで国の補助を得て完了した。筆者が全巻をこの手で開きハケで清掃大中小破に区分修理費用約四百万円余で補修したのである。破損箇所調査中に一寸五分に一寸位の紙に椎尾と書かれたものが随所にあつたので、椎尾大僧正に伺つた所「私として問題のある箇所に入れておいた」と云われた。問題とは感激の点又は疑問点もあらうと思う。上人が研究の時も又そのような点が少くなかつたであらう。上人二十四才保元元年、嵯峨清凉寺に一七日參籠は、その疑問解決のためではなからうか。少くとも、この時、上人は第一回の一切経読了研究後と考えられる。ついで仏教の古都と讃えられた南都に、法相宗の名匠藏俊僧都を訪ねたことは、この間の消息を物語る。上人は修行者の態であつた。

大床はおはしける僧都、いかが思はれけん、あかり障子をあけて、うちへ請じつれたてまつりて対面し、法談ときをうつされけり

と伝えている。一宗の名匠は軽々と一介の修行者にあうことはなかつた。然るにどうしたことが障子をあけてうちへ請じ入れたことは、仏縁のしからしたものであらう。藏俊僧都は

「貴房は只人にあらず、おそらくは大権の化現か」と悦び、一期の間、毎年供養を贈られたほどに心服されたことは、上人の信行が立派であつたからである。

醍醐に三論宗の名匠権律師寛雅又仁和寺華嚴宗名匠大納言法橋慶雅等を往訪したことは、求道上の問題解決のため精進努力の一端を物語る。

五

上人の知性について、上人九才春から叔父菩提寺観覺得業の許で十五才正月迄修行、観覺は、上人十五才久安三年（一四七）二月初旬、比叡山東塔持宝房源光師にあてた、上人贈状に「文殊の像」一体とし、

上人の性、流るる水たりも、すみやかにして、一を聞えて十を覚える。きくところ憶持して、更に忘るることなし。と、稀なる大法器としてゐる。同年八日に改めて、山内功德院肥後阿闍梨皇円庵に入室した。

皇円師は、栗田関白四代の後三河権守重兼の嫡男少納言資隆朝臣の長兄、相生の皇覚法橋の弟守、当代名代の法将一山の雄才であつたのである。皇円は、

去夜の夢に、満月室に入ると見た、今この法器に、あふべ

き前兆

と大変満足であつた。

久安六年九月十二日生年十八才尚残る紅葉の中を、西塔黒谷の慈眼房釈空を訪い「幼稚の昔たり成人の今に至るまで、父の遺言わすれがたくして、とこしなへに隱遁の心」を申し上げた。少年ではやくも出離の心を起せること、法然道理の聖なりと随喜されて、法然房と号し、実名は源光の上の源と、釈空の下の子をとって、源空と名付けられたのである。釈空上人の空の字を賜つたことは、それに適う法器であつたからである。

生れながらの秀才であっても、努力精進と苦心研究に打ち込まれたくは、その素質が磨かれるものではない。

上人は英才法器の上に、父時国公の遺言「さらに会稽の恥を思い、敵人をうらむことはなかれ。これ偏に先世の宿業なり。もし遺恨をむすばゞ、その仇、世々につきがたかるべし。しかし早く俗をのがれ、家を出て、我菩提をとぶらい、自らの解脱を求めよ」と、教示された旨を、よく理解し、終生の指針として、現当二世出離の要道を探究された。

その心願をつねに想起確立せしめた一端は、武士の勃興と源平争乱であり、僧兵をもつた諸大寺の抗争であつた。上人十五才入山の六月二八日山徒神興を奉じて強訴、十八才上人が

黒谷隠遁の一ヶ月前八月五日南都興福寺大衆強訴又上人二十才久寿元年十月三日叡山法華堂常行堂炎上、上人二十八才永暦元年六月十三日には東塔西塔抗争東塔大敗のことあり、同年十一月十二日山徒強訴、上人三十一才の長寛元年六月九日山徒が三井園城寺を火き翌年も僧兵をくり出して合戦等と世上と教界共極めて不安定乱世であった。

この間も上人の一切研究は止むことがなかった。

上人が西方極楽往生を信ずるようになったのは、私聚百因縁集によれば、六条天皇の永満元年（一一六五）三十四才頃と伝えている。

是より先、上人十九才仁平元年に、藤原宗友が日本往生伝統拾遺伝について本朝新修往生伝を作り浄土往生人四十一人を収めている。上人がそれを読み、娑婆即寂光土と云う、天台宗教義から見るとこの世以外に極楽地獄ないと云う不合理。而るに、社会には源平戦乱による乱世、諸大寺僧兵の合戦は、娑婆即寂光土説を納得しかねる問題、又は阿弥陀經による西方極楽世界往生等と、上人の仏性に大光明が輝き、念仏信仰によれば凡夫往生も如来の大慈悲の化現にあらざるやと、浄土往生の機は熟し、更に一切研究、ついで、浄土五祖伝承の往生浄土思想こそ如来の大慈悲とする善導大師教学研究へと進んで行った。その研究はユトリのある云わば悠々

と含味されていたことを次の一事は物語る。

上人が三十六才仁安三年（一一六八）秋、黒谷で華嚴經を開講時には、机の辺に小蛇がいた。上人は門弟信空に捨てさせたその夜の夢に、上人と華嚴經を守る守護の竜神である心配無用と告げられたと伝えられる。又四十八巻伝には、この頃上人は、密観成就して蓮花や宝珠を拝すと伝えられることはその一端であろう。

上人は、善導教学の研究、別時念仏声名の研修も怠ることなく、往生要集を親読され、益々念仏往生へとすすまれた。嵯峨二尊院絹本着色上人像は、承安四年、後白河法皇が上人を御所に請じて御受戒、往生要集をきき大いに感銘され、藤原隆信をして、上人真影を図画せしめられたものと伝えられる。上人の信仰は益々進展し、善導大師の觀經証定疏に至り、散善義三心釈の一心専念の文又は同疏附属の上来雖説の文と云うも、その本願力に従って、浄土宗を開立された。

ついで黒谷林中を経て、西山広谷に仮住、そうして東山吉水に移つたのである。

参詣コースA 京都北白川から六時間大津泊り。逆コース有
B コース 京都北白川から三時間半 大津泊り。逆コース有

国鉄湖西線坂本、雄琴、堅田各駅タクシー利用

法然上人略年譜

西暦	年号	年令	事	歴
1133	長承2	1	4月7日、美作国(岡山県)稲岡で生誕。	
1141	永治元	9	春、父漆間時国公、稲岡庄の預所明石定明の夜襲に遇い負傷し死亡	
			冬、菩提寺の観覚得業に弟子入り	
1145	天養2	13	春比叡山に登り源光に師事	
1147	久安3	15	11月、皇円のもとで出家受戒	
1150		18	9月、西塔黒谷の叡空の室に入り、この年法然房源空と改名	
1156	保元元	24	嵯峨清涼寺に参籠、あと南都遊学	
			7月10日、保元の乱	
1159	平治元	27	12月9日、平治の乱	
1171	承安元	39	感西法然に師事	
1173		41	親鸞生誕	
1175		43	春、善導の『散善義』により専修念仏に帰す(浄土宗開宗)	
	(7.28)		この年、西山広谷に移り、やがて東山吉水に止宿、高倉天皇	
	安元元		に授戒	
1177		45	6月、鹿ヶ谷事件	
1179	治承3	47	上西門院のために7日間説戒する	
1180		48	6月、福原遷都。平重衡、東大寺・興福寺焼きうち	
1181	養和元	49	東大寺勸進職を辞し、重源を推挙	
1183	寿永2	51	平清盛死亡	
			7月28日、木曾義仲洛中に乱入、この日1日聖教を見ず	
1184		52	7月2日、平重衡に説戒する	
1185		53	平家滅亡	
1186	文治2	54	秋、大原談義(一説、文治5年)	
1189		57	九条兼実に法語、往生業を説じ、授戒する	
1190	建久元	58	2月、東大寺三部經講説	
1191		59	重源の10問に答う(東大寺十問答)	
1192		60	後白河法皇に授戒する	
			源頼朝、鎌倉に幕府開く	
1198		66	『選撰本願念仏集』を選述、兼実に呈す。この年たびたび三昧を発得	
1200	正治2	68	5月、鎌倉幕府念仏を禁止	
1201	建仁元	69	3月、親鸞、法然に師事	
1204	元久元	72	聖光、鎮西に帰る、『七ヶ条起請文』をつくり門弟を誡む	
			比叡山、興福寺など念仏門に攻撃を加えはじめる	
1206	建永元	74	住蓮、安楽、鹿ヶ谷で別時念仏、六時礼讃を修す。念仏宗停止の口宣に対してたびたび評定がある。住蓮、安楽死罪	
1207		75	専修念仏停止宣下。2月、法然土佐配流(流入藤井元彦として)	
			親鸞は越後配流。九条兼実死亡。	
1211	建暦元	79	8月、配流赦免の宣旨下る。入洛して東山大谷に止宿。	
1212		80	正月25日、入寂	

法然仏教とその展開



法然上人の時代

——いよいよ開宗八百年ですが、本日は両先生に忌悼のな
いところをお話いただければと思います。まず法然上人を生
んだ時代背景からお伺いしたいのですが——

寺内 あの時時代の時代相ですが、私たちの常識を絶するもの
があったのではないかと申しますのは藤原政治の爛熟期
に、何故『往生要集』のような著作がなされたのか。実際には
このあと七、八年でその藤原体制の崩壊をみるのですが、
そこに表わされた地獄の様相が、単に文字の上でなく現実の
ものとなってくる。何かそうした不安感があったようですね。
梶村 当時の庶民精神の構造は、一つには神仏習合思想の影
響で、たたりという面が強調されています。そうした中に阿
弥陀さまのみによって救われるという思想は、強烈なるアビ
ールとなったと思いますね。

寺内 確かにこのあたりとかのろいということは、当時の人
びとに多大な圧力となっていますね。例えば当時の最大のイ
ンテリと称された少納言信西でさえ、己れの身の危険を察知
した折、いち早く奈良に逃亡し非業の最期を上げています
が、これをみるまでもなく彼らの宗教概念からは、最後まで
このろいの呪術からぬけきることができなかったのだでしょ

う。この呪術からの開放、これが法然仏教の一大眼目であつたのではないでしようか。

——そうした末法思想は、庶民感情の中にも強くあつたのでしうか——

梶村 もちろんありました。しかし、庶民だけのものではない。貴族にも当然あつた訳ですから、全ての人びとをその中にまぎこむ形となつたのです。したがって逆にいえば、この末法思想は庶民にとっては救いとなつたといつても過言ではないでしう。

寺内 末法思想は以前からあり、そこからぬけ出したいと思ふことにのみとられていたのですが、法然仏教はそうした中にこそ生きぬこうという、全く異つた思想を打ち出されたところに意義がありましよう。

梶村 一般には末法だから救われなくなつたといふことなのですが、上人は末法だからこそ救われる道がある、いやなければならぬ、それもただ一つの道であるとされたのです。

寺内 親鸞も法然上人のお考えを感受されていますし、道元の禪にしてもしかり、やはり一つの方法、道といふことが、あの時代の救ひの方法ではなかつたと思ひますね。

梶村 ですから私は、その先驅者をなした法然上人をもつて日本仏教の誕生とすると見ていますが、その最大の要素は末

作 家 寺内 大吉

亜細亜大学教授 梶村 昇

司 会 編 集 部

法にこそ救いがなければならぬとする。それまでの仏教概念を一八〇度転換したことにありましよう。

寺内 末法でなければ救われようと、求めもしなかつたといふことになりますね。

求道中の上人の生活

——そうした時代に誕生された上人は、父の遺言によつて出家の道を選ばれたのですが、母の位置、影響はどうだったのでしょうか——

梶村 九才で父と死別、十三才で母との別れとなるのですが、あの時代のこと生き別れといえましよう。四十八巻伝などを見ても、母の心情として手離すのをきらっています。やはり世の母といえましよう。そうした母の思いが以後の上人の生涯を貫いています。立身出世ではない、何とか救われる道

を一途に行かれたことになると思います。

寺内 確かにそうした心情が上人の将来に大きなさえとなつたことは事実でしょうが、逆の見方もできないでしょうか。

敗者の子として母共々、以後安隠な生活は保証されていない。そのために観覚得業のもとに逃げ込んだのではないか。更に比叡山までのがれたのではないかとさえ見えています。母はその後消息を断っていますね。

梶村 前半の考えには私も賛成です。伝説でしょうが、母が子育てのために祈願した本山寺という寺がすぐそばにありますが、本来ならばそのために授つた子ですから、そこへ行けばことはたりたと思います。ましてや上人は一人息子ですから、その出家は漆間家の断絶を意味します。そう簡単に出家させる訳にはいきませんが、実際にはそれよりはるか山深い観覚得業の所へ行つたということは、確かに後難を恐れたためといえましょう。

——その後、比叡山に登り皇円や叡空のもとで修行をつまなれた訳ですが、この態度は母や周囲の人びとの期待を裏切らないものでありましたね——

寺内 ご出身は地方の豪族の嫡子ですが、この武家層はこれからのびる階級であつた訳で、いうならばその血を継いだたくましい人ではなかつたでしょうか。

梶村 そうですね。外から浄土宗を見ていると、何か福徳圓滿なさまがその代表のようにみられがちですが、法然上人はもつと剛腹な、力強い人であつたと思われまふ。でなければ日本仏教を根底からひっくりかえすようなことはできなかったといえますね。

寺内 確かに、そうしたたくましい人でなければこわくて専修念仏に帰するなどとはいえませぬね。狂人ならともかく、学徳兼備した知慧第一の法然房といわれた人の発言ですから。

梶村 教学の面でも非のうちどころがない位整っています。**寺内** 例えばあの個性の強かつた親鸞が、素直にすべてを投げ出してしたがつた相手、それが法然上人なのですから、余程のスケールの持ち主であつたと思われまふ。お弟子のタイプを見てもいろいろではありませんか。

梶村 俗に法然十五流といいますが、確かにあつたと思われまふし、これをまとめたものが法然流であり、こうした面から浄土教団、教学を考えなおす必要があります。

——やがて上人は黒谷別所へ入られますが、このころはどのようにお考えですか——

寺内 当時の比叡山では僧兵と同宗間の争いがさかんで学問どころではない。そこで心ある僧は道を求めて別所へむかつたのではないのでしょうか。

梶村　そこでの生活は清貧に甘んじたものであったでしょうが、それは自分のみのもの、小乗的立場で他を救うというのは出てこなかったと思います。この聖の出現で、それまでの律令体制化の仏教が崩壊はしたが、聖はまたその中で一つのパターンを作りあげてしまったのです。ですから比叡山にも、聖のパターンの中にも安住できなかったところに法然上人の大きな悩みがあったと思います。

寺内　しかし、そうした聖の生活は貴族のスポンサーがついていればこそその生活であった訳ですからね。「玉葉」「平家物語」などにも、こうしたところの事実を伝える記述が多く見受けられます。

梶村　法然上人にしても、忠通のもとで「往生要集」の講義をしていますし、また華嚴の講義もしています。そうした交渉がなければ黒谷の生活は成りたちませんね。

寺内　そうした実績がなければ知慧第一の尊称はつけられません。よく上人には著作が少ないから大学者でないという見方がされますが、これは大きな間違いです。当時の学問は暗記の方法が中心です。上人が一切経を七回半披覽したということは、単に読んだということではなく、七回半ですべてを暗記されたのではないかと考えたいのです。

梶村　当時比叡山は仏教の綜合大学であった訳ですが、そこ

で出世するためには試験を受けなければならない。その問題は「汝ここからここまでを覚えよ」という暗記課題であったのです。そこで認められた上人ですからこそ、知慧第一も当然かも知れません。

専修念仏への回心

——この知慧第一の法然房にして悩まれのですから——

寺内　ここに開宗のポイントがあります。何故黒谷から西山広谷へ下りられたが、その目的行動を宗学においても未だはっきりとしたものがありませんね。

梶村　この点について私なりの説をたてています。法然上人滅後四十五年の正嘉元年に制作された「私聚百因縁集」というインド・中国・日本の仏教に関する因縁話を集めた書があります。その中で法然上人に関して注目すべき項目が四つほどあります。これは因縁集であるから史的価値がないとされがちですが、他の伝記と比べてそう簡単に見捨てるべきではないでしょう。中でも三十三才（永満元年）より浄土の教門に帰入するという記事があります。本来宗教体験のないところにその教学は成りたたいといわれますが、悩み、道を求めたあげく忽然とひらく、その体験を通して己れの説を立てるのです。ですから宗教は体験かもととなり、それを体系化し

たものが教養となるのですから、他の伝記が四十三才で開宗されたとするのは間違いないのですが、三十三才で回心され、その教養的裏付けの典拠「観經疏」を見出されたのが四十三才の時であったと考えたいのです。

寺内 この説の裏付けとして、上人が下山されて最初に求めた地、西山広谷には京名な念仏者遊蓮房円照が止宿されていましたが、その出合いのところ、このあたりをよく研究する必要がありますね。

念仏集団の大同団結

——そうしますと、回心から開宗まで十年あまり、この間に宗教体験を通して学んだものを体系化したのでしょうか、このあたりをどのようにお考えですか——

梶村 回心されたとしても、それは自分だけの証明であった訳です。当時の学問は議論をかさね、その確証なり裏付けを必要としたのです。上人がその哲学的裏付けを得るまでに、長いようですが十年を要したと解したいのです。著作の少ない上人が「往生要集」について四冊書いていますが、これはこの十年間に書かれたと思います。しかし、そこにある念仏は自分が回心された念仏とは異質なものであり、典拠にはならなかった。そこで次に永観珍海の念仏に入ったのですが、

これも観想の念仏であって、教養的な裏付けを得ることができなかった。そしてようやくにして善導によって、己れの求めた称名念仏の典拠を見出されたと考えるべきでしょう。この間の比叡山の念仏、ことに恵心の念仏は善導大師の念仏のところがぬけている。そこに上人は気づかれたと思いますし、そこに下山の理由があったと考えます。

寺内 また教団面からみると、確かに上人自身は承安五年に教団確立をされたと思いますが、その後二十年あまりは平隠であったのが、建久八年前後から急に動きが見られます。私なりの直感なのですが、この頃の資料をみると、上人が三昧発得された頃より念仏聖の集団が、上人を盟主として大同団結して浄土宗を作り、そのユニホームもそれまでのニビ色から、禁止されていた黒衣にかえ、活発な行動に移ったのではないかと推測します。だからこそ、それまでの上人のシンパが背をむけ始めますし、一連の弾圧が始まるのです。またそれまで登場してこなかった一念義の幸西が、この頃より上足の中に名を連ねてきていますが、これなどをみても念仏集団の大同団結がなされたような気がしてなりません。

梶村 建久九年の「選択集」選述以後、そうした動きがみられますから、教団論を考える時たしかにポイントとなってくるでしょうね。

寺内 それ以前の上人は貴族にも授戒したりしましたが、政治的な野心もない一念仏僧であつたと思います。しかし、一度そうした集団の盟主に推れたならば、専修念仏のためには命を投げ出すともという、強い姿勢を示されますが、またそうした変革ができるスケールの大きな人であつたと思われれます。

現代こそ念仏を

——こうした法然上人の一端なご精進、ご研鑽によって生み出された称名念仏の御教えは全国に広まり、伝えられて、ここに開宗八百年を迎えた訳ですが、この尊い教えを現代にどのように生かして行くか。これが課題となつて来ますが——
寺内 「往生要集」の出た時代背景は今日と酷似していると思います。新しい文化が大陸から導入され、いかにも榮えているようであるが、低辺には何か不安感が充ちあふれている。それが数十年後には保元・平治の乱などによって、現実のものとなつたのですが、今日においても物質文明の極点に來ています。こうした時にこそ、法然仏教の念仏の教えが、より必要ではないかと考えます。ただその方法は變つて当然です。あの当時と比べて人間の知恵、生活環境の変化がありますから、ただ一向に念仏すべしという訳にはいかないでしょう。しかし、ただ唯一のものに絶対に心服せざるを得ない

時代は、遠からず必ず來ると信じますね。

梶村 鎌倉の祖始の中で、法然上人の書物はあまり読まれていませんが、聖徳太子以後の六百年の仏教体制を転換させたことを顧る時、今一度よく見直す必要があります。そしてその根拠というべき、それまでの仏教が修行した者だけが救われるとしたことから、ただ南無阿弥陀仏と称えることによつて、万民すべてが救われるとしたこの教えは、今日当り前にとられていますが、この画期的なことを考え出された上人の力は大変なものであり、この点をもっと強調すべきでしょう。この教えを現代的にどう生かすか、いろいろな方法があるでしょう。私は現代の定義として、経済生活にすべてが奉仕している時代といっていますが、この経済主体の生活が、今日的な末法ではないかと思ひます。この経済生活優位の中で人間が生き、その主体性を回復させる。そうした中に上人の意図されたものがあつたと考えております。

寺内 また日本人が思想をもつたのは上人によつて始まつたといえましょう。今日的には思想の主体性を改めて確立すべき時に來ていると思ひます。更にあれだけの法難、圧迫を受けながら、なお八十才まで生きようとした、生きることを大切にされた。このご精神を今こそ考えるべきでしょう。

浄土宗の宝物

「足引の御影」

京都 二尊院藏

法然上人のお姿を描写した御影は多数現存しているが、その中で代表的なものは、この京都二尊院に伝わる「足引の御影」をはじめ、京都金戒光明寺に伝わる「鏡の御影」、京都知恩院に伝わる「伝隆信筆法然上人像」などがある。これらの中で「足引の御影」は昔から最も有名であったらしい。室町時代の代表的な公家である三条西実隆の日記を見ると、彼はわざわざ二尊院に出かけて、この法然上人の「足引の御影」を参拝したことを記しているほどである。

「足引の御影」の名前の由来は寺伝によると、九条兼実が法然上人を崇敬するあまり、上人のお姿を写して兼実の持仏堂に安置したいと希望したところ、上人は「私のようなものの姿を高貴な関白である貴方の御所に置く

ことは恐れおおい」といって辞退された。そこで兼実はある時、法然上人を招いて浴室に案内し、沐浴が終って内外衣を着して、片足を投げ出して休息されているところを、絵師の託間法眼に命じて、簾中からひそかに写させた。その後上人がかさねて兼実の屋敷を訪ねた折に、兼実はこの肖像を前にかけ、上人に開眼供養をしてほしいと願い出た。上人は驚いて、この足が出ている姿はまことにはずかしいと、祈念されると、たちまちに肖像の足が引き込まれたという。これは上人の奇特と絵師の巧妙さを示す逸話として伝えられている。

しかし事實は、この「あしびき」は山にかかる枕詞であり、この御影のある二尊院が小倉山の山中にあるところから、他所にある法然上人の御影と区別するために「小倉山の二尊院にある御影」を、昔の人々がしゃれて「足引の御影」と呼んだものと思われる。そして「足引」の由来は「あしびき」と語路合せをして作り出されたエピソードであろう。

しかし、いずれにしてもこの「足引の御影」は法然上人の肖像画中の白眉であり、現在非常に摩滅して見づらくなっているが、上人のお姿を知る上で貴重な肖像である。

(宇高良哲)

影御の引足



頭部を拡大したもの



京都 二尊院藏

(浄土宗辞典より借用)

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円
(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円
(送料 不要)

浄土 四月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十九年三月二十五日 印刷
昭和四十九年四月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二二八七番

浄土宗開宗八百年記念

施本用誌 『浄土』

定価 100円（特別価格ですので送料実費）

残部僅少、注文はお早目に。

このたび弊会では、浄土宗開宗八百年を記念いたしまして、『浄土』誌四月号の内容と同様のものではありませんが、外装を一新して、記念施本用雑誌として『浄土』開宗八百年記念号を作製いたしました。どうぞ檀信徒の皆様への施本用といたしまして、記念法要等諸種の行事にご利用下さいませ。

浄土宗開宗八百年記念トラクト 『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 250 円（〒 70円）

（200部以上 単価230 円 送料実費）

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番